

列王記第二 17 - 18 章 「ただ一つの神」

1 A アッシリヤ捕囚 17

1 B 最後の王 1 - 6

2 B 他の神々 7 - 23

1 C 密かな悪 7 - 12

2 C 預言者の警告 13 - 23

3 B 混合宗教 24 - 41

1 C 強制移住 24 - 33

2 C サマリア人 34 - 41

2 A ヒゼキヤの宗教改革 18

1 B 数々の勝利 1 - 8

2 B アッシリヤの侵攻 9 - 16

3 B アッシリヤの脅迫 17 - 37

1 C エジプトへの依拠 17 - 25

2 C エルサレムの神 26 - 35

3 C 黙する屈辱 36 - 37

本文

列王記第二 17 章を開いてください、17 章と 18 章を学びます。私たちは列王記全体の総まとめになる章をこれから学びます。それは北イスラエルがアッシリヤによって捕え移され、なぜ捕え移されたのかを書き記している部分に入ります。列王記はソロモンの治世から始まりました。彼はダビデと同じように主に対して全き心で歩んでいましたが、晩年に外国の女を愛しました。そして彼女たちの神々を拝み始めました。高き所を立てて、そこに祭壇を造ったのです。それがイスラエルの地に浸透しました。王国分裂後の北イスラエルでは、さらに金の子牛を造り、エルサレムにおける礼拝に行かせないようにしました。主なる神のみをあがめ、他の神々に仕えないという命令をないがしろにした、それゆえ約束のものを受け継ぐことができないのだ、というのが、列王記が伝えたい内容です。

しかし、興味深いことに、ユダの国も滅ぼされようとするその末期に、主はダビデと心を全く一つにしている二人の王をお立てになります。一人はヒゼキヤ、もう一人はヨシヤです。彼らは、イスラエルの国がまったく暗くなってしまった、そのような時にさえ主に従うというイスラエルの残りの民を代表する人物であります。

1 A アッシリヤ捕囚 17

1 B 最後の王 1 - 6

17:1 ユダの王アハズの第十二年に、エラの子ホセアがサマリアでイスラエルの王となり、九年間、王であった。17:2 彼は主の目の前に悪を行なったが、彼以前のイスラエルの王たちのようではなかった。

ホセアは、王ペカを暗殺して王になっています。ペカが、アラムの王レツインと手を組みアッシリヤに対抗しましたが、ユ

ダに対しても手を組むように迫りました。ユダは乗ってこなかったため、ペカはレツインと共にユダに攻めたのです。再び攻撃しようとするときに、ユダの王アハズはアッシリヤに助けを求めました。アッシリヤは攻めてきて、アラムを滅ぼしました。それから、イスラエルの領土にも侵略して、ヨルダン川の東側、そしてガリラヤ地方を自分たちの物にしました。

興味深いことに、イスラエルの最後の王になるホセアは、ヤロブアムの罪を犯さなかったようです。「彼以前のイスラエルの王たちのようではなかった」とあります。けれども主の目の前に悪を行っていたとありますから、他の偶像礼拝を行っていたと考えられます。けれども彼は致命的な過ちを犯します。

17:3 アッシリヤの王シャルヌエセルが攻め上って来た。そのとき、ホセアは彼に服従して、みつぎものを納めた。17:4 しかし、アッシリヤの王はホセアの謀反に気がついた。ホセアがエジプトの王に使者たちを遣わし、アッシリヤの王には年々のみつぎものを納めなかったからである。それで、アッシリヤの王は彼を逮捕して牢獄につないだ。17:5 アッシリヤの王はこの国全土に攻め上り、サマリアに攻め上って、三年間これを包囲した。17:6 ホセアの第九年に、アッシリヤの王はサマリアを取り、イスラエル人をアッシリヤに捕え移し、彼らをハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メデイヤの町々に住ませた。

イスラエルが滅亡してしまいました。ペカがアッシリヤに反逆したので攻め取られたのですが、ホセアはそれで初めは貢物を納めていました。ところが、エジプトと密かに手を結んでいたのです。この前話しましたように、今、イスラエルとその周辺の国々は、北にとつともない大国アッシリヤが攻め入ろうとしています。南にはエジプトという大国がありました。アッシリヤに対抗するために、エジプトに寄りすがろうとしたのです。今、ちょうどアッシリヤの王も変わったばかりでした。ペカの時は、ティグラテ・ピレセルが王であり彼がイスラエルに攻め入ったのですが、今、新しい王シャムヌエセルになっています。王権が移行した時が、権力が不安定になっていますので反逆の好機です。けれども、これがかえってアッシリヤの怒りを買って、イスラエルを全滅せしめます。紀元前 722 年の話です。

まずシャムヌエセルは、ホセアを逮捕します。それからサマリアを包囲します。陥落まで三年かかりました。サマリアを建てたオムリ、そしてその子アハブはかなり頑丈な城壁を建てていたと思われます。（歴史においては、最終的な陥落はその次の王サルゴン二世が行いました。モーセは、約束の地にイスラエルが入る直前に、主に背き続けたらこうなるぞ、という警告を約七百年前にすでに発していました。「主は、遠く地の果てから、わしが飛びかかるように、一つの国民にあなたを襲わせる。その話すことばがあなたにはわからない国民である。その国民は横柄で、老人を顧みず、幼い者をあわれまず、あなたの家畜の産むものや、地の産物を食い尽くし、ついには、あなたを根絶やしにする。彼らは、穀物も、新しいぶどう酒も、油も、群れのうちの子牛も、群れのうちの雌羊も、あなたには少しも残さず、ついには、あなたを滅ぼしてしまう。その国民は、あなたの国中のすべての町囲みの中にあなたを包囲し、ついには、あなたが頼みとする高く堅固な城壁を打ち倒す。・・・（申命記 28:49-52a）」この預言は、バビロンがエルサレムを包囲した時にも起こりましたが、まずサマリアに起こりました。神は、祝福される時、必ずその約束を果たされる真実な方ですが、裁かれることについても必ずそれを実行する真実な方です。

そしてイスラエル人が捕え移されます。その地域ですが、ユーフラテス川の上流地域であり、またははるか東にあるメデイヤの町々にも及んでいます。アッシリヤの征服は、「強制移住」という政策によって行いました。自分たちが支配した民を、その慣れ親しんだ土地から完全に引き抜いて、全く見慣れない土地に移住させます。そして、他の全く異な

る、遠くにいる民族をその空いたところに移住させるのです。全く新しい地なので、そこでの生活を送るので精いっぱい、団結してアッシリアに反逆する気力を失わせませぬ。

アッシリア人が捕え移す時の記録が残っています。彼らを裸にさせ、何百キロも歩かせませぬ。そして、弦にいくつも釣り針をつけて、それをそれぞれの捕虜の下唇にかけて、連れていきました。実はこの残虐な征服について、アモスがすでに、豊かさの絶頂期であったヤロブアム二世の時代に彼らに語っていたのです。「神である主は、ご自分の聖にかけて誓われた。見よ。その日があなたがたの上にやって来る。その日、彼らはあなたがたを釣り針にかけ、あなたがたを最後のひとりまで、もりにかけて引いて行く。(4:2) 」

2 B 他の神々 7 - 2 3

1 C 密かな悪 7 - 1 2

17:7 こうなったのは、イスラエルの人々が、彼らをエジプトの地から連れ上り、エジプトの王パロの支配下から解放した彼らの神、主に対して罪を犯し、ほかの神々を恐れ、17:8 主がイスラエルの人々の前から追い払われた異邦人の風習、イスラエルの王たちが取り入れた風習に従って歩んだからである。17:9 イスラエルの人々は、彼らの神、主に対して、正しくないことをひそかに行かない、見張りのやぐらから城壁のある町に至るまで、すべての町々に高き所を建て、17:10 すべての小高い丘の上や、青々と茂ったどの木の下にも石の柱やアシェラ像を立て、17:11 主が彼らの前から移された異邦人のように、すべての高き所で香をたき、悪事を行なって主の怒りを引き起こした。17:12 主が彼らに、「このようなことをしてはならない。」と命じておられたのに、彼らは偶像に仕えたのである。

7 節から 23 節にまで、なぜアッシリアに捕え移されることになったのか、その理由を述べています。それは午前礼拝で話しましたが、神がイスラエルによって追い払われたカナン人たちの風習と全く同じことを、イスラエル人自身が行ったからです。モーセが申命記において、約束の地に入る前にこのことも強く戒めていたのですが、私たちはヨシュア記の終わりのところからすでに、それを密かにやり始めていたイスラエル人がいたことを知っています。そして士師の時代にはそれが習慣化してしまいました。けれども最後の士師サムエルによって霊的復興が起こり、ダビデの時代に唯一の神のみの礼拝が確立されました。ソロモンはそれを受け継ぎましたが、その晩年に外国の妻たちが持ち込んだ神々のために高き所を建て、そこに祭壇を造ってその神々を拝むことを許し、自分もそれを行ってしまったのです。そして、時を経て、人々は再び偶像礼拝の深みに入っていったのです。

これは、イスラエルと同じように神の民である教会に対する警告でもあります。ローマ 2 章には、神はえこひいきされない方であるとあります。主イエス・キリストを自分の救い主として呼び求め、救われたのは、この世の汚れから免れるためであるのに、主を信じていると言いながらこの世と変わらない生活を送っているのであれば、その人には神の国を相続することはない、ということです。つまり、「私は罪赦されたクリスチャンだ。だから、これまでのように罪を犯しても、救いは保障されている。」という考えが、騙しであるということです。もちろん、救いは一方的な神の恵みであり、罪を犯してしまっても悔い改めと罪の告白によって神は清めてくださいます。けれども、罪の中に留まっていることはできないのです。「あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者・・・これが偶像礼拝者です。・・・こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。むなしいことばに、だまされてはいけません。こういう行ないのゆえに、神の怒りは不従順な子らに下るのです。ですから、彼らの仲間になってはいけません。(エペソ 5:5-7) 」

7 節から 12 節までは、「正しくないことをひそかに行ない」という言葉が鍵です。表向きは主なる神をあがめていても、密かにこれらのことを行なっていました。なぜ密かに行っているかと言えば、それが口に出すのも恥ずかしい忌まわしいことだったからです。カナン人や異邦人はそれが当たり前だと思っていたことでしょう、けれども神の御霊によって聖めを受けた私たちには、あまりにも恥ずかしいことなのです。「なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。（エペソ 5:12）」

2 C 預言者の警告 13 - 23

17:13 主はすべての預言者とすべての先見者を通して、イスラエルとユダに次のように警告して仰せられた。「あなたがたは悪の道から立ち返れ。わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、また、わたしのしもべである預言者たちを通して、あなたがたに伝えた律法全体に従って、わたしの命令とおきてとを守れ。」17:14 しかし、彼らはこれを聞き入れず、彼らの神、主を信じなかった彼らの先祖たちよりも、うなじのこわい者となった。17:15 彼らは主のおきてと、彼らの先祖たちと結ばれた主の契約と、彼らに与えられた主の警告とをさげすみ、むなしいものに従って歩んだので、自分たちもむなしいものとなり、主が、ならってはならないと命じられた周囲の異邦人にならって歩んだ。

主がモーセに律法を与え、それに従わなかったイスラエルに対して、預言者を神は遣わされました。私たちは、列王記の中で、数多くの預言者の現れを見ました。それは、律法に立ち返れという命令です。

けれども、彼らは「うなじのこわい者」となった、とあります。これは、牛などに頸木をかけようとしても一切受け付けない、うなじをこわくしているという様子です。主が与えられる律法が頸木ではありますが、それを振り払おうとしている姿です。詩篇第二篇にも、国々の王が神とキリストの与えられる枷を外そうという言葉があります。私たちが、神の与えられる命令が自分を窮屈にするものであり、だからこれから自由にされたいと願う人は、神の命令の意味を知らないといけません。神の命令は、私たちが幸せに生きるために与えられています。私たちの益となるために与えられています。そしてイエス様は、ご自分が負わせる頸木は軽いと仰られているのです。重いと思っているのは、自分が勝手に考えているだけです。

そして「虚しいものに従って、自分たちも虚しいものとなった」とあります。偶像は中身のないものです。目があっても見ることができず、耳があっても聞くことができず、口があっても話すことができません。同じように、私たちの社会で意味のある生活と言われているけれども、そしてそのことに縛られているけれども、実は真理に照らせば空しいものはたくさんあります。お酒文化、男女関係、嘘、悪口、また名誉や成果など、「世を生きていく上で必要なもの」として語られます。けれども現実には、中身がないのです。中身がないと分かっているながら、みな同じことを行なっています。

私はこの前実家に帰りまして、非常に感動したことがあります。父の証しを聞きました。神の救いはすばらしいことですが、それに加えて感動したのは、父の昔の生活を改めてはっきり聞けたことです。昭和十年代に父は生まれ、彼の両親は早く亡くなりました。実に八歳の時から父は親のない生活をしていたのですが、父がまた母、つまり私の祖父と祖母が亡くなった時のことも話してくれました。また彼の出身は福島県福島市です。先祖のことを思い、また家系のことを思うことができた時間でした。自分のルーツを知ることは、非常に有意義なことです。改めて今の自分を再確認することのできる時間であります。

けれども、このようなことは信仰を持つ前にはしませんでした。仏式の葬儀や法事、また墓参りによって親戚と会うのですが、その時にもし私がそのような行事に関わらないと、「家を大事にしていない」というレッテルを貼られます。けれども、実際に親戚づきあいをしている中で、真実に先祖を敬い、故人を偲んでいるのでしょうか？法事をしないことが、先祖を敬っていないことなのでしょう？いや、むしろそれは強制であり、儀式であり、中身がないのです。むしろ、そのような行事に参加していない中で、教会の中で、クリスチャンになった父の中に、私は亡くなった祖父母のことを思い、偲ぶことができたのです。真の神を知っているからこそ、同じ神によって造られた先祖をも敬うことができます。

17:16 また、彼らの神、主のすべての命令を捨て、自分たちのために、鑄物の像、二頭の子牛の像を造り、さらに、アシェラ像を造り、天の万象を拝み、バアルに仕えた。17:17 また、自分たちの息子や娘たちに火の中をくぐらせ、占いをし、まじないをし、裏切って主の目の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こした。17:18 そこで、主はイスラエルに対して激しく怒り、彼らを御前から取り除いた。ただユダの部族だけしか残されなかった。

北イスラエルの金の子牛礼拝のことです。そして、従来のアシェラ崇拝、バアル崇拝も行いました。午前礼拝で説明しましたように、「自分たちの息子や娘たちに火の中をくぐらせ」というのは、モレク崇拝のことです。望まない妊娠への対処法であります。その他、占いやまじないなど、オカルトにも傾注しました。これらがイスラエルを神が滅ぼした理由です。

17:19 ユダもまた、彼らの神、主の命令を守らず、イスラエルが取り入れた風習に従って歩んだ。17:20 そこで、主はイスラエルのすべての子孫をさげすみ、彼らを苦しめ、略奪者たちの手に渡し、ついに彼らを御前から投げ捨てられた。

ユダの国はバビロンによって滅ぼされます。この前の学びで、アハズがこれらの忌まわしいカナン人や周囲の異邦人の風習を取り入れ始めました。ヒゼキヤまたヨシヤによって宗教改革は行われましたが、最後の王たちは悪から離れることがなかったので、ついにイスラエルと同じ運命をたどりました。

17:21 主がイスラエルをダビデの家から引き裂かれたとき、彼らはネバテの子ヤロブアムを王としたが、ヤロブアムは、イスラエルを主に従わないようにしむけ、彼らに大きな罪を犯させた。17:22 イスラエルの人々は、ヤロブアムの犯したすべての罪に歩み、それをやめなかったので、17:23 ついに、主は、そのしもべであるすべての預言者を通して告げられたとおり、イスラエルを御前から取り除かれた。こうして、イスラエルは自分の土地からアッシリヤへ引いて行かれた。今日もそのままである。

ヤロブアムの罪は、「人々が主に従わないようにしむけた」ことにあります。自分自身が罪を犯しただけでなく、イスラエルの民がエルサレムにいて神殿で礼拝させないようにさせたことです。このようなつまずきは、神の怒りを買います。「また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。（マルコ 9:42）」

3 B 混合宗教 24 - 41

そして次に、アッシリヤがイスラエルを連れ去った後、この土地で起こったことの話をしています。

1 C 強制移住 24 - 33

17:24 アッシリヤの王は、バビロン、クテ、アワ、ハマテ、そして、セファルワイムから人々を連れて来て、イスラエルの人々の代わりにサマリヤの町々に住ませた。それで、彼らは、サマリヤを占領して、その町々に住んだ。17:25 彼らがそこに住み始めたとき、彼らは主を恐れなかったので、主は彼らのうちに獅子を送られた。獅子は彼らの幾人かを殺した。17:26 そこで、彼らはアッシリヤの王に報告して言った。「あなたがサマリヤの町々に移した諸国の民は、この国の神に関するならわしを知りません。それで、神が彼らのうちに獅子を送りました。今、獅子が彼らを殺しています。彼らがこの国の神に関するならわしを知らないからです。」17:27 そこで、アッシリヤの王は命じて言った。「あなたがたがそこから捕え移した祭司のひとり、そこに連れて行きなさい。行かせて、そこに住ませ、その国の神に関するならわしを教えさせなさい。」

非常に興味深いことが起こりました。アッシリヤは、空白の土地に自分たちが征服したまた他の地域の者たちをここに強制移住させました。イスラエル人たちが捕え移された地域と違い地域が列挙されています。そしてサマリヤの町々に住ませたところ、主が獅子を送られた、とあります。主は、ご自分の民は不従順であっても、ご自分の土地に対してはねたみを持っておられる方です。ご自分がまったく忘れられることを由とされませんでした。

そこでアッシリヤの王は、彼らの言葉に応答しています。当時の人々は、こうした神々についてのことには今の者たちよりも純朴でした。その土地の神が敬われていないから、ということで、イスラエル人で捕え移された祭司を連れ戻させて、その習わしを教えさせることにしたのです。

17:28 こうして、サマリヤから捕え移された祭司のひとりが来て、ベテルに住み、どのようにして主を礼拝するかを教えた。17:29 しかし、それぞれの民は、めいめい自分たちの神々を造り、サマリヤ人が造った高き所の宮にそれを安置した。それぞれの民は自分たちの住んでいる町々でそのようにした。17:30 バビロンの人々はスコテ・ベノテを造り、クテの人々はネレガルを造り、ハマテの人々はアシマを造り、17:31 アワ人はニブハズとタルタクを造り、セファルワイム人はセファルワイムの神々アデラメクとアナメクとに自分たちの子どもを火で焼いてささげた。17:32 彼らは主を礼拝し、自分たちの中から高き所の祭司たちを自分たちで任命し、この祭司たちが彼らのために高き所の宮で祭儀を行なった。17:33 彼らは主を礼拝しながら、同時に、自分たちがそこから移された諸国の民のならわしに従って、自分たちの神々にも仕えていた。

興味深いことが起こりました。元々、北イスラエルの祭司たちは、背教の祭司たちです。ヤロブアムが金の子牛を造り、自分勝手に祭司を選び、その祭儀を行なわせたのですが、それでもヤハウェを礼拝しているという名目がありました。ところがいま、その祭司が連れてこられたのですが、それはそれで行ったのですが、外国から連れてこられた者たちは、自分たちの神々を連れてきて、その神々も拝んでいたのです。強調されているのが、「彼らは主を礼拝しながら、同時に、自分たちの神々にも仕えていた」ということです。混合宗教であります。ちょっと難しい言葉では、「シンクレティズム」と言います。

私たち日本人はこれに慣れ親しんでいます。神仏習合ですね。仏教と神道は相容れないものなのですが、仏教の寺院に神社の祠があります。そして死んだ人を「仏」となると言いますが、仏は悟った人という意味で、実は神道の「カミ」となるという言葉は仏に変えただけです。同じように、サマリヤの町にいた人々も神々の習合を行なっていました。

2 C サマリヤ人 34 - 41

17:34 彼らは今日まで、最初のならわしのとおりに行なっている。彼らは主を恐れているのでもなく、主が、その名をイスラエルと名づけたヤコブの子らに命じたおきてや、定めや、律法や、命令のとおりに行なっているのでもない。17:35 主は、イスラエル人と契約を結び、命じて言われた。「ほかの神々を恐れてはならない。これを拝みこれに仕えてはならない。これにいけにえをささげてはならない。17:36 大きな力と、差し伸べた腕とをもって、あなたがたをエジプトの地から連れ上った主だけを恐れ、主を礼拝し、主にいけにえをささげなければならない。17:37 主があなたがたのために書きしるしたおきてと、定めと、律法と、命令をいつも守り行なわなければならない。ほかの神々を恐れてはならない。17:38 わたしがあなたがたと結んだ契約を忘れてはならない。ほかの神々を恐れてはならない。17:39 あなたがたの神、主だけを恐れなければならない。主はすべての敵の手からあなたがたを救い出される。」17:40 しかし、彼らは聞かず、先の彼らのならわしのとおりに行なった。17:41 このようにして、これらの民は主を恐れ、同時に、彼らの刻んだ像に仕えた。その子たちも、孫たちも、その先祖たちがしたとおりに行なった。今日もそうである。

この箇所は、ユダの民がバビロン捕囚から帰還して、ユダの地に戻ってきてから書いたものであります。そこには、サマリヤ人がいました。アッシリア捕囚によって大半のイスラエルの民は捕え移されたのですが、わずかに残っている貧しい者たちが、移住してきた異邦人と結ばれました。その混血がサマリヤ人です。彼らのことを意識して、今、著者はこのことを強調しています。彼らは確かに、主の名を唱えている。けれども、その他に神々を拝んでおり、彼らは主をあがめている訳ではないのだ、ということです。

帰還民は、エルサレムで激しい反対に遭いました。その周辺に住んでいる者たちから神殿建設で反対を受けたのです。その中にサマリヤ人がいました。エズラ記とネヘミヤ記のどちらにもあります（エズラ 4 章）。なぜなら、彼らは共に神殿を再建しようと言ったのですが、ユダヤ人たちが、彼らが異邦人との混血であることを知っていたからです。エズラもネヘミヤも、ソロモンが外国人の女を愛したから、主から離れてしまったという大きな教訓を持っていました。そして異教との混合も行っていたことも知っています。それで拒んだのです。この時から、サマリヤ人とユダヤ人の反目が始まりました。

こうした背景があって、新約聖書の中に数多くのサマリヤ人が出てきます。サマリヤの女の話では、イエス様が井戸のところ腰をかけて女に話しかけましたが、彼女が怪訝な顔をしていたのは、サマリヤ人とユダヤ人は付き合いをしなかったからです。そしてイエス様が敢えて、らい病人で癒された者の中でサマリヤ人が戻ってきたこと、それから良きサマリヤ人の話をされたのは、ユダヤ人にサマリヤ人に対する偏見が強かったからです。そしてサマリヤの女の時には、実際、彼女自身がメシヤについての正しい知識を持っていたし、多くのサマリヤの男たちがイエス様を信じました。使徒の働きでは、ピリポが伝道して多くのサマリヤ人がイエス様を信じました。

ここから分かるのは、私たちは負い目を持っているからといって福音の妨げにはならない、ということです。むしろ、サマリヤの女のように、神の国に近づいていることがあるのです。

2 A ヒゼキヤの宗教改革 18

こうしてイスラエルが、ヤハウェだけでなく他の神々をあがめている中で、ユダの国では今までにない宗教改革が行われました。ユダの中にさえ高き所があり、偶像礼拝から離れていませんでした。けれども、アハズの子ヒゼキヤがこれを行ないます。

1 B 数々の勝利 1 - 8

18:1 イスラエルの王エラの子ホセアの第三年に、ユダの王アハズの子ヒゼキヤが王となった。18:2 彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はアビといい、ゼカリヤの娘であった。18:3 彼はすべて父祖ダビデが行なったとおりに、主の目にかなうことを行なった。18:4 彼は高き所を取り除き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り倒し、モーセの作った青銅の蛇を打ち砕いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた。

これまでのユダの善い王は、ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行なった、という評価は受けました。けれども、ただし高き所は取り除かなかった、と書かれていました。エルサレムに神殿が建てられ、神の名がそこに置かれた時以来、神はエルサレムでのみ主を礼拝するように定められていました。けれども、人々は身近なところで主を礼拝したい、そうすれば便利だからということで、高き所を活用したのです。ところが、異教徒は高き所での礼拝をしていましたから、彼らの影響を受けていったのです。いつか、誰かがこの高き所も取り壊さなければいけなかったのですが、だれもそれを行なう勇氣を持っていませんでした。ところが、ヒゼキヤがこれを行なったのです。イスラエル旅行に行った時に、ベエル・シェバの町には祭壇の遺跡がありました。それがもともと発見された時はバラバラに散らばっていたのです。すなわち、祭壇が取り壊されていた跡なのです。ヒゼキヤはこうして、高き所を次々と取り壊していったのです。

ヒゼキヤがなぜ、ここまで主の心と一つになれていたのでしょうか？これは、王族に仕えていた預言者イザヤがいたこととは言ってもありません。彼はヒゼキヤの曾祖父ウジヤの時から預言を行なっていましたが、ウジヤが死んだ時に預言者としての召しを受けました。アハズに対して、インマヌエルの預言を行ないました。イザヤによって、神の知識を得て、それで主のみに仕えるという心が与えられていたのです。

ヒゼキヤは高き所の他に石の柱とアシェラ像を壊しました。ユダの民も密かに行っていて、アハズはこれを大胆に行っていたのですが、ヒゼキヤは一掃します。

そして非常に興味深いのは、モーセの作った青銅の蛇を打ち砕いたことです。約七百年前に、モーセは青銅の蛇を造りました。荒野の旅の時に、イスラエル人が不平を鳴らしました。いつも食べ物がない、もう飽きたとつぶやいたのです。それで主は、燃える蛇を宿営に送り込みました。それによって民は苦しみ、死んでいきました。けれども、主とモーセに罪を犯した、と彼らは告白したのです。その時に主は、青銅の蛇を作って旗竿にかけなさい、と命じられました。そしてその蛇を見る者は生きる、と言われました。そして実際、青銅の蛇を見たものは噛まれても死なないうで、生きることができました。

イエス様はニコデモに、モーセの蛇が挙げられたように、人の子は挙げられなければいけないと言われました。聖書では蛇は罪の象徴です。蛇がエバを惑わしたことによってアダムは罪を犯しました。そして青銅は裁きの象徴です。祭壇

は青銅で造られました。そこで、木にかけられることによって、罪が裁かれることを青銅の蛇は表していました。同じように、イエス様は木にかけられて、ご自分が罪となられて、それで私たち罪人を義とすることを可能にされたのです。

しかし数百年の時が過ぎて、人々はこの素晴らしい、罪の贖いを示す遺物をして偶像礼拝を行っていたのです。青銅の蛇そのものを拝んでいました。それでヒゼキヤはそれを打ちこわし、「ネフシュタン＝ただの青銅」と呼びました。私たち人間は、霊であられる神が自分の意識から希薄になると、その代替物を欲します。それが、神に関すること、キリストに関することさえ、行ってしまいます。その典型例はカトリック等の聖遺物と呼ばれるものです。十字架のキリスト像はそうですし、イスラエルに行けば私たちプロテスタントの信者は幻滅することが非常に多いのです。聖墳墓教会というのが、イエス様が十字架につけられ、葬られ、そしてよみがえられた場所に建てられたものとして可能性が大いなのですが、そこに行けば、イエス様の死なれた遺体が置かれたところだと言っているところに石があり、そこに接吻する人が数知れません。

けれども、プロテスタント信仰を持っている私たちであっても、生ける神、霊であられる方が見えないので、何か見えるものに頼っていく傾向があります。例えば、「私はこの場所で、イエス様と出会う劇的な体験をした。」と言って、いつまでもその場所に固執したり、特別な愛着を抱き続けるのです。その劇的な体験から、今の自分が、違うところにおいてもますますイエス様が親しく、近い方になっていなければならないのです。以前の自分よりも、今の自分がイエス様が共におられることを強く意識しているのでなければ、私たちは何かを遺物のようにあがめてしまっています。それは体験かもしれないし、あるいは、ある教会指導者かもしれません。あるいは特定の信条かもしれません。教会に何かが揃っていることによって、自分は神を感じるというような雰囲気かもしれません。これらのものは、ヒゼキヤが行ったように粉碎される必要があります。今、自分のいるところでイエス様が最も近くなっているという呼びかけに応答してください。

18:5 彼はイスラエルの神、主に信頼していた。彼のあとにも彼の先にも、ユダの王たちの中で、彼ほどの者はだれもいなかった。18:6 彼は主に堅くすがって離れることなく、主がモーセに命じられた命令を守った。18:7 主は彼とともにおられた。彼はどこへ出陣しても勝利を収めた。彼はアッシリアの王に反逆し、彼に仕えなかった。18:8 彼はペリシテ人を打ってガザにまで至り、見張りのやぐらから城壁のある町に至るその領土を打ち破った。

まさに、かつてのダビデのような連戦連勝であります。ダビデに主が共におられました。それでダビデが行くところ、どこでも勝ちました。アハズの時代に、これまでユダに従属していた周辺の民が反逆したのですが、ペリシテ人もその一人でした。けれども彼らにも打ち勝ちます。

そこで、ヒゼキヤはなんとアッシリアにも反逆します。ここには、彼の信仰的熱情があると同時に、イザヤ書を紐解きますと、ヒゼキヤはエジプトとの同盟を結びながらアッシリアに反抗しています。そしてこれが大きな罫となります。エジプトの助力は空しいものに終わり、ユダの町々はことごとく倒れて、エルサレムを包囲されるに至るのです。

2 B アッシリアの侵攻 9 - 16

しかしそれで、ヒゼキヤの評価は落ちることはありません。その置かれている環境は、とてつもない脅威的出来事に満ちていました。

18:9 ヒゼキヤ王の第四年、すなわち、イスラエルの王エラの子ホセアの第七年に、アッシリアの王シャルマヌエセルがサマリヤに攻め上って、包囲し、18:10 三年の後、これを攻め取った。つまり、ヒゼキヤの第六年、イスラエルの王ホセアの第九年に、サマリヤは攻め取られた。18:11 アッシリアの王はイスラエル人をアッシリアに捕え移し、彼らをハラフと、ハボル、すなわちゴザンの川のほとり、メディヤの町々に連れて行った。18:12 これは、彼らが彼らの神、主の御声に聞き従わず、その契約を破り、主のしもべモーセが命じたすべてのことに聞き従わず、これを行なわなかったからである。

ヒゼキヤが三十歳になるかならないかの時、治世を始めてから四年しかっていない時、北イスラエルがアッシリアによって滅んでしまいました。アッシリアの国がエルサレムの目の前にあるという状況になりました。

18:13 ヒゼキヤ王の第十四年に、アッシリアの王セナケリブが、ユダのすべての城壁のある町々を攻めて、これを取った。18:14 そこでユダの王ヒゼキヤはラキシユのアッシリアの王のところへ人をやって、言った。「私は罪を犯しました。私のところから引き揚げてください。あなたが私に課せられるものは何でも負いますから。」そこで、アッシリアの王は銀三百タラントと、金三十タラントを、ユダの王ヒゼキヤに要求した。18:15 ヒゼキヤは主の宮と王宮の宝物倉にある銀を全部渡した。18:16 そのとき、ヒゼキヤは、ユダの王が金を張りつけた主の本堂のとびらと柱から金をはぎ取り、これをアッシリアの王に渡した。

この時のアッシリア帝国の歴史的文献は豊富にあります。アッシリアがどのように南進して、ユダの町々を攻め取ったのかは、その時の王セナケリブ自身の言葉で証されています。「ユダヤ人ヒゼキヤに関していえば、私は彼の46の城壁のある町々とそれらを囲む無数の小さな村落を包囲し征服した。私は戦利品として、そこからあらゆる階層の20万150人、男女、馬、らば、ろば、らくだ、牛、羊を連れてきて、数え上げた。彼自身（ヒゼキヤ）は、私が王都エルサレムに籠（かご）の中の鳥のように閉じこめた。私は彼を見張り所で取り囲み、誰も彼の町に出入りが出来ないようにした。・・・彼（ヒゼキヤ）は私のところに、私の王都ニネヴェに、金30タラント、銀800タラント、最良のアンチモニー巨大な赤い石の塊、象牙の装飾の寝台・・・を持ってきた。彼は貢ぎ物を払い、敬意を表するために彼の使者を送った。（dateiwao.fc2web.com/hizekiyastory.htm より引用）」

ここに出てくるラキシユの町は、ペリシテ人の地とユダ山地の間にあるシェフェラと呼ばれる低地の南に位置する町です。そこから南はエジプトにつながり、軍事的戦力的価値のある要塞の町でした。そこに行きますと、アッシリアが攻め入った爪痕が生々しく残っています。そして碑石には、ラキシユを攻め取って、ユダヤ人の兵士を三人串刺しにしている姿を彫っています。さらに、兵士の皮をはぎ取って、その後何時間が生かしておいた、ということも起こったそうです。そしてラキシユが陥落すると、そこから北北東にエルサレムが間近にあります。エルサレムが陥落するのも時間の問題だったのです。

そこでヒゼキヤは屈しました。主の宮と宝物倉にある金銀を渡して、アッシリアに引き下がってもらうように願ったのです。けれども、アッシリアは引き下がりませんでした。ものすごい戦いです。これは、信仰の戦いであり、霊の戦いです。ヒゼキヤは主によりすがり、主に頼っていたのに、一向に脅威は去らないのです。それで金銀による宥めという肉的手段に頼ってしまいましたが、状況はもっと悪くなるだけです。モーセの時を思い出しませんか、彼はパロのところに行き、イスラエルの民を出ていかせなさいという神の言葉を伝えましたが、パロはますますイスラエル人を虐げたのです。主に従っているはずなのに、勝利どころか圧迫がますます酷くなっていきます。それと似たようなことが起こっています。

3 B アッシリヤの脅迫 17 - 37

そして次に、アッシリヤがエルサレムを包囲する場面が出てきます。ここからは圧倒的な軍事力をもって、心理戦をしかけてきます。彼らが投降して、屈服すべく脅迫をします。この脅迫が、まさに悪魔のなす中傷・告発と同じであります。悪魔は、「私たちの兄弟たちの告発者（黙 12:11）」と呼ばれています。

1 C エジプトへの依拠 17 - 25

18:17 アッシリヤの王は、タルタン、ラブ・サリス、およびラブ・シャケに大軍をつけて、ラキシュからエルサレムのヒゼキヤ王のところへ送った。彼らはエルサレムに上って来た。彼らはエルサレムに上って来たとき、布さらしの野への大路にある上の池の水道のそばに立った。18:18 彼らが王に呼びかけたので、ヒルキヤの子である宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、アサフの子である参議ヨアブが、彼らのもとに出て行った。

ラキシュから、ラブ・シャケをセナケリブは送りました。ちなみに、ラブ・シャケは名前ではなく称号です。そして、「布さらしの野への大路にある上の池の水道のそば」とありますが、これは包囲の時に死活的な水源もアッシリヤの手に落ちたということ象徴するような場所です。そして大事なものは、イザヤ書 7 章には、彼の父アハズが、イザヤと同じところで会っていることです。そこで、北イスラエルとアラムによる攻撃の脅威を受けていた時に、それは起こらないとイザヤが神の言葉を伝えたのに、アハズはアッシリヤに頼りました。その同じところで、これからヒゼキヤは、「お前はエジプトに拠り頼んでいる。」と責められます。

18:19 ラブ・シャケは彼らに言った。「ヒゼキヤに伝えよ。大王、アッシリヤの王がこう言っておられる。いったい、おまえは何に拠り頼んでいるのか。18:20 口先だけのことばが、戦略であり戦力だと思いついでいるのか。今、おまえはだれに拠り頼んで私に反逆するのか。18:21 今、おまえは、あのいたんだ葦の杖、エジプトに拠り頼んでいるが、これは、それに寄りかかる者の手を刺し通すだけだ。エジプトの王、パロは、すべて彼に拠り頼む者にそうするのだ。

ラブ・シャケの言ったことは、事実です。これこそ、ヒゼキヤとユダが行ってはいけなさとイザヤを通してさんざん言われていたことでした。まずその部分を突いて、彼らを心理的に弱体化させようとしているのです。そして、これは悪魔が私たちにまず初めに行くことであることを知らなければいけません。それは私たちの肉の弱さを突いてくることです。徹底的に、その部分を猛攻撃し、ある時は誘惑という手段によって、またある時には、肉に従ったその失敗をここにあるように、徹底的に責め立てることによって攻撃します。

18:22 おまえたちは私に『われわれは、われわれの神、主に拠り頼む。』と言う。その主とは、ヒゼキヤが高き所と祭壇を取り除いておいて、ユダとエルサレムに向かい『エルサレムにあるこの祭壇の前で拝め。』と言ったそういう主ではないか、と。

肉の弱さを責めた後に、ヒゼキヤの献身に攻撃をしかけました。非常に巧妙です。この献身こそが彼のほめるところなのですが、肉の弱さを指摘した後なので、この献身が悪いものであるかのように摩り替えていることができます。具体的にはヒゼキヤが高き所を取り除いたことを責めています。そしてエルサレムにある祭壇の前で拝め、と言ったことを責めています。その排他性を攻撃しているのです。いかがでしょうか、これこそ多神教文化の中に生きている者にと

っての、とてつもない心理的圧迫ではないでしょうか？キリストを信じることはできるのですが、キリストのみを信じるのは、辛いのです。他のものを排除しているという罪だと感じてしまいます。

しかし、真実は逆です。イザヤ書を読めば、主なる神はこの天地を造られた方であり、国々や手桶の一粟、島々は天秤の埃とみなす、と言われていました。木や石で作った偶像に仕えることによって、この無限大の神を同列に置くという愚かな行為を犯しているのです。

18:23 さあ、今、私の主君、アッシリヤの王と、かけをしないか。もしおまえのほうで乗り手をそろえることができれば、私はおまえに二千頭の馬を与えよう。18:24 おまえは戦車と騎兵のことでエジプトに抛り頼んでいるが、私の主君の最も小さい家来のひとりの総督をさえ撃退することはできないのだ。

エジプトに抛り頼むということは、馬に抛り頼むことです。モーセを通して馬に頼ること、そのためにエジプトに行くことは決してしてはならない、あなたがたはエジプトで奴隷であったから、金輪際、戻っていいはいけないところだと戒められていました。その肉の部分をつぶ・シャケは嘲笑っています。

18:25 今、私がこの所を滅ぼすために上って来たのは、主をさしおいてのことであろうか。主が私に『この国に攻め上げて、これを滅ぼせ。』と言われたのだ。」

ヤハウエ、主の御名を使って、ヒゼキヤを責めています。主は彼の味方であられるのに、主が彼の敵になっていると嘘を付いているのです。悪魔は、主の名を使ってまでして、私たちを神の愛から引き離そうとします。「これだけの過ちを犯したのだから、イエスはお前を見限ったのだ。イエスをお前の主だと言ってみる、イエスの名が汚れるぞ。」こう言って、すべての罪と咎を負って、自分のために死んでくださったほどに愛されているイエスとは異なる、偽物を悪魔は突きつけてくるのです。

2 C エルサレムの神 26 - 35

8:26 ヒルキヤの子エルヤキムとシェブナとヨアブとは、つぶ・シャケに言った。「どうかしもべたちには、アラム語で話してください。われわれはアラム語がわかりますから。城壁の上にいる民の聞いている所では、われわれにユダのことばで話さないでください。」18:27 すると、つぶ・シャケは彼らに言った。「私の主君がこれらのことを告げに私を遣わされたのは、おまえの主君や、おまえのためだろうか。むしろ、城壁の上になすわっている者たちのためではないか。彼らはおまえたちといっしょに、自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるのだ。」

当時は、国々が貿易をする時に、アラムで話されていた言葉を使っていました。ヘブル人の話すヘブル語ととても似ていたので、国の高官つぶ・シャケはすぐに習得していたのでしょう。ちなみに、ダニエル書は2章から7章までアラム語で書かれています。なぜなら、イスラエルがバビロンに捕え移されてから、神が異邦人の帝国がどのように変遷するのか、幻によって啓示している部分だからです。イスラエル人に対するものがヘブル語で、世界の諸国に対して語っておられるところがアラム語で書かれている、ということです。

18:28 こうして、つぶ・シャケはつっ立って、ユダのことばで大声に呼ばわって、語って言った。「大王、アッシリヤの王のこ

とばを聞け。18:29 王はこう言われる。ヒゼキヤにごまかされるな。あれはおまえたちを私の手から救い出すことはできない。18:30 ヒゼキヤが、主は必ずわれわれを救い出してください、この町は決してアッシリアの王の手に渡されることはない、と言って、おまえたちに主を信頼させようとするが、そうはさせない。

ラブ・シャケは、何とかして民から主への信頼を取り去ろうと躍起になっています。ということは、裏を返すと、彼らの主に対する信頼こそが、アッシリアに屈服するのを妨げているものであることを彼はよく分かっていたのです。それだけ、ヒゼキヤは民に対して主に立ち返れと激励していたということ、ヒゼキヤが主に抛り頼む者であったことが、異教徒にもわかっていたということです。私たちは、どのような誹りを受けているのでしょうか？「お前は、キリストに抛り頼んでいるという。お前は自分をキリストの者、クリスチャンなどと言う。」という誹りを受けたら、それだけキリストの証しを立てていたということに他なりません。

18:31 ヒゼキヤの言うことを聞くな。アッシリアの王はこう言っておられるからだ。私と和を結び、私に降参せよ。そうすれば、おまえたちはみな、自分のぶどうと自分のいちじくを食べ、また、自分の井戸の水を飲めるのだ。18:32 その後、私が来て、おまえたちの国と同じような国におまえたちを連れて行こう。そこは穀物とぶどう酒の地、パンとぶどう畑の地、オリーブの木と蜜の地である。それはおまえたちが生きながらえて死なないためである。たとい、ヒゼキヤが、主がわれわれを救い出してくださいと言って、おまえたちをそそのかしても、ヒゼキヤに聞き従ってはならない。

これは誘惑ですね。主に抛り頼まなければ、容易に豊かな食物が得られるのに、というのは大きな誘惑です。私たちは、主に抛り頼む以外の方法で、いとも簡単に目的のものを得ることができる社会の中にいます。日曜日に仕事をしないために、失われる仕事の機会が多いですね。主に祈るのではなく、自分がすぐに動けば手に入るという誘惑です。

18:33 国々の神々が、だれか、自分の国をアッシリアの王の手から救い出したかどうか。18:34 ハマテヤアルパデの神々は今、どこにいるのか。セファルワイムやヘナヤイワの神々はどこにいるのか。彼らはサマリヤを私の手から救い出したか。18:35 国々のすべての神々のうち、だれが自分たちの国を私の手から救い出したかどうか。主がエルサレムを私の手から救い出すとでもいうのか。」

ここです、この言葉がついに主を怒らせました。「ぶつつん来た」という言い方がありますが、まさに主なる神にとってこの言葉はぶち切れるものです。歴代誌第二において、こう書いてあります。「このように、彼らは、エルサレムの神について、人の手で造ったこの地の民の神々についてと同じように、語ったのである。(32:19)」

当時の世界は、国と国が戦う時にその国を代表する神と神の戦いだと考えられていました。宗教戦争という現代になってから使う言葉がありますが、昔はすべてが宗教戦争だったのです。そして、一方が勝つと、自分の神が敵の神に打ち勝ったということで、戦利品としてその偶像を持ち去ってくることを行ないました。したがって、今、アッシリアは自分たちがどれだけの神々を打ち倒したか考えてみよ、と言っています。そしてエルサレムの神が、アッシリアの神に勝てると思っているのか？と問い質しているのです。

イザヤ書には、先ほど話しましたように、あまりにも無限大の神がおられて、木や石で作った神々といっしょくたにして

いることの愚かさを何度も何度も、神ご自身が語られていることを書き記されています。主なる神に従うと言いながら、同時にこれらの偶像に仕えるのであれば、神の栄光がそのような形で踏みにじられる訳です。偶像によって、キリストの栄光が見えなくさせられるのです。だから神は、「わたしのほかに神々があってはならない。わたしに似せて像を造ってはならない。」と厳に戒められています。これが真実であり、ヒゼキヤはその真実に従って生きました。けれども、世界はそれが排他的であるとし、ユダの民の中でさえ妥協している人々がいたのです。それでも主のみに救いを求めるのか、これが私たち一人一人に問いかけられています。

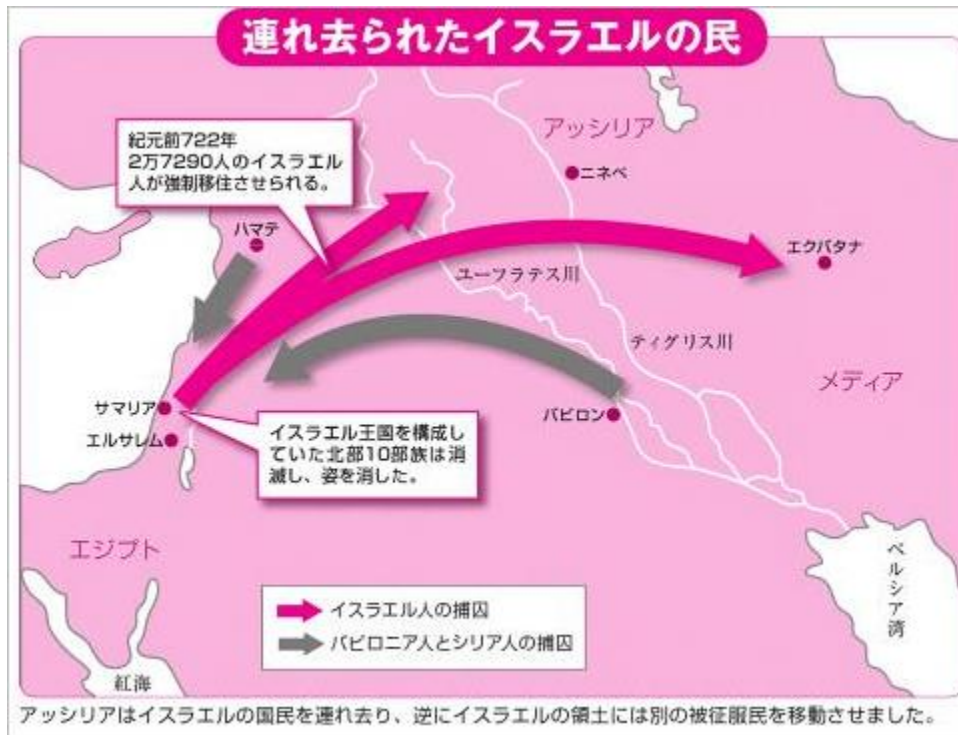
3 C 黙する屈辱 36 – 37

18:36 民は黙っており、彼に一言も答えなかった。「彼に答えるな。」というのが、王の命令だったからである。18:37 ヒルキヤの子である宮内長官エルヤキム、書記シェブナ、アサフの子である参議ヨアブは、自分たちの衣を裂いてヒゼキヤのもとに行き、ラブ・シャケのこぼれを告げた。

ヒゼキヤの命令は賢明でした。ラブ・シャケの言っていることは、反論できるに有り余る議論です。神の真の知識を持っている者ならば、あまりもの無知であります。でも答えるな、と命じました。これが敵に対抗する方法です。エバが惑わされたのは、一言反論したからであります。その代わりにこれら高官は衣を裂いて王に報告します。そして次の章も、王自身が衣を裂いて、主の宮の前で嘆きます。これこそが正しい応答です。人に反論するのではなく、主の前で心を注ぎだすのです。主が味方なのですから、必ず主は答えてくださいます。

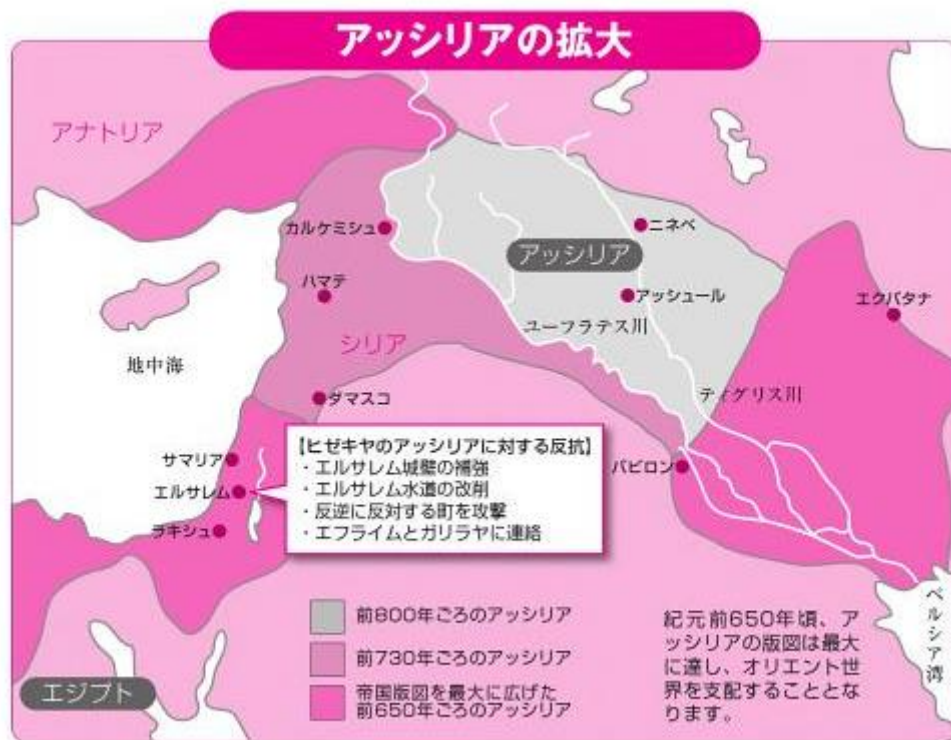
今回は、主の前に出ていくヒゼキヤと、主ご自身の救いを見ます。そしてヒゼキヤの晩年とその子マナセの生涯を読みます。

アッシリヤとイスラエル



アッシリヤ王とイスラエル・ユダ

アッシリヤの王の名前		北イスラエル	南ユダ王国
ティグラテ・ピレセル	アッシリヤの脅威	連合軍の敗北	アハズはアッシリヤを頼る (神殿宝物倉は空、祭司・レビ人はリストラ)
		最後の王ホセアの即位	
シャルマヌエセル(5世)		ホセアは牢獄 3年間の包囲	729 ヒゼキヤ即位
サルゴン2世		サマリヤ陥落 アッシリヤ捕囚	722
セナケリブ			711 ユダの町々が攻め取られる
			701 エルサレムを包囲する アッシリヤ軍18万5千人壊滅
エサル・ハドン			



新アッシリア時代の歴代王

- アダド・ニラリ2世 (前911年 - 前891年)
- トウクルティ・ニヌルタ2世 (前891年 - 前883年)
- アッシュールナツイルパル2世 (前883年 - 前859年)
- シャルマネセル3世 (前858年 - 前824年)
- シャムシ・アダド5世 (前823年 - 前811年)
- アダド・ニラリ3世 (前810年 - 前783年)
- シャルマネセル4世 (前783年 - 前772年)
- アッシュール・ダン3世 (前772年 - 前755年)
- アッシュール・ニラリ5世 (前754年 - 前745年)
- ティグラト・ピレセル3世 (前744年 - 前727年)
- シャルマネセル5世 (前727年 - 前722年)
- サルゴン2世 (前722年 - 前705年)
- センナケリブ (前705年 - 前681年)
- エサルハドン (前681年 - 前669年)
- アッシュールバニパル (前669年 - 前627年頃)
- アッシュール・エティル・イラニ (前627年頃 - 前623年頃)
- シン・シャル・イシュクン (前623年頃 - 前612年頃)
- アッシュール・ウバリト2世 (前612年頃 - 前609年頃)